The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大谷栄一／藤本頼生編著『叢書・宗教とソーシャル・キャピタル2　地域社会をつくる宗教』
Author(s)	小池, 靖
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(1), p. 89-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

大谷栄一／藤本頼生編著
『叢書・宗教とソーシャル・キャピタル２　地域社会をつくる宗教』
明石書店、2012 年 12 月、A5 判、301 頁、2500 円＋税

小池　靖*

1. はじめに

本書は、明石書店より現在（2013 年春）刊行されつつあるシリーズ「叢書　宗教とソーシャル・キャピタル」の第 2 巻として編まれたものである。題名のとおり、主に日本の地域社会における、諸宗教、諸教団の活動を通して「宗教がソーシャル・キャピタルになるのかどうか」（p. 298）を問うた論集である。

本書で最も頻出するキーワードは「無縁社会」のようである。個人化が進み、かつての紐帯が衰退しつつある、つまり「無縁化」しつつあると考えられている日本社会に対して、宗教にはどのようなことができるのだろうか。日本におけるコミュニティ機能の創造と再生は可能なのだろうか。そうした問題をこの書は、特に地域社会に則して論じている。

2. 本書の内容と構成

本書は、3 部構成となっており、I、地域社会、II、社会問題、III、新しいつながりという大きな柱を立て、その各部に３つの章と、１つのコラムがある。コラムは、宗教研究者の手によるものではなく、「現場からの声」として、何らかのかたちで宗教に関わる NPO などで地域活動を実際におこなっている当事者によって書かれている。

まえがき　大谷栄一
総論　宗教は地域社会をつくることができるのか？　大谷栄一

I　地域社会と切り結ぶ宗教
第 1 章　地域社会と神社　藤本頼生

* 立教大学社会学部・准教授・koike-toiawase@rikkyo.ac.jp

第 2 章　地域社会と寺院　山口洋典
第 3 章　在日コリアン寺院　宮下良子
現場からの声①　現代人にとって「宗教」とは　中尾伊早子

II　社会問題への対応
第 4 章　過疎と寺院　櫻井義秀
第 5 章　支縁のまちネットワーク　宮本要太郎
第 6 章　沖縄におけるキリスト教系 NPO のホームレス支援　白波瀬達也
現場からの声②「安住の地」を地域に拓く　渡辺順一

III　生成する新しいつながり
第 7 章　ボランティアをする人たちの動機にみる宗教性　板井正斉
第 8 章　集合墓を核とした結縁：「桜葬」の試み　井上治代
第 9 章　宗教のインターネット活用が築くソーシャル・キャピタル　黒崎浩行
現場からの声③　ともに寄り添い、ともに学ぶ　吉永岳彦・山下千朝

あとがき　藤本頼生

まえがきに続き、イントロダクションとして大谷栄一による「総論」がある。日本のムラという共同体は解体していったが、2000 年代以降には、ボランティア、NPO などの「新しい公共」の台頭もあったという。そのような状況のなか、宗教は、地域社会におけるつながりの結び直しに寄与することができるのだろうか、と大谷は問うている。また、ソーシャル・キャピタル概念には、個々の集団内の凝集性を高める「結束型」ソーシャル・キャピタルと、その集団をこえて社会全体に波及してゆこうとする「橋渡し型」ソーシャル・キャピタルの２類型があることもここで示されている。

【I　地域社会と切り結ぶ宗教】

このI部は、地域に密着した、伝統宗教による新旧の活動・取り組みを概観するものとなっている。

1 章「地域社会と神社」（藤本頼生）では、全国 7 万 9 千にもおよぶ神社

が、講組織、祭礼、年中行事などを通じて、氏神と氏子を取り結び、地域コミュニティの結束の源泉となってきた様子が手際よく描かれている。

2 章「地域社会と寺院」（山口洋典）では、大阪の浄土宗・應典院の実践から、寺院が地域にも開かれた拠点となる可能性を示唆している。今後の寺院における「橋渡し型」ソーシャル・キャピタルを期待させる内容となっている。

3 章「在日コリアン寺院」（宮下良子）において筆者は、ニューカマーの多い昨今の在日コリアン寺院が、エスニックというよりもトランスナショナルなものとなってきており、日本人の信徒をも惹き付けるようになっている状況を概観している。在日コリアン寺院に赴く日本人信徒がどのような人たちなのか、さらに著者から聞いてみたいところである。

この部のコラム・現場からの声①「現代人にとって『宗教』とは」（中尾伊早子）では、環境教育や福祉活動をおこなう NPO「ちんじゅの森」の活動を紹介しながら、「先人の知恵と生活リズムを受け継」ぎ、「目に見えないものを共有して繋がる心を見守ってくれる神様の存在も身近なところに感じる」といった「地域の精神文化そのものが宗教」であると主張している（p. 127-8）。

【II　社会問題への対応】

4 章「過疎と寺院」（櫻井義秀）ではがらりと雰囲気が変わり、地元・北海道の過疎地域の寺院を 2 年間調査した実績をふまえ、過疎化した地域における伝統宗教の、過酷とも言うべき現状を、きわめて現実的かつ詳細にとらえている。限られた資源の中で奮闘努力しなければならない過疎地の僧侶の姿が浮かび上がってくる。

5 章（宮本要太郎）では、大阪・釜ヶ崎のホームレス支援のための、宗教間をこえた連帯のネットワークである「支縁のまちネットワーク」の活動を紹介し、ホームレスのような究極の苦境からむしろ新たなスピリチュアリティが見出せたり、また釜ヶ崎での活動を通じて新たな「結縁」が起こったりする可能性もあるということを示唆している。なお宮本はこの「支縁のまちネットワーク」代表の一人でもある。

6 章「沖縄におけるキリスト教系 NPO のホームレス支援」（白波瀬達也）では、沖縄においてホームレス支援をしている Faith-Related Organization の

活動をかなり好意的に紹介している。もちろん、支援ハウスからの自立を逡巡する元ホームレスの入居者が居たり、またそこがコミューンのようになってしまったりするという両義性も白波瀬は指摘している。

コラム・現場からの声②「『安住の地』を地域に拓く」は、先述の「支縁のまちネットワーク」のもう一人の代表である金光教羽曳野教会長・渡辺順一によって書かれたものである。このコラムでは、伝統宗教・新宗教が、昨今の地域社会の衰退に対して手を差し伸べるべきであるとして、その可能性を示唆している。「『ホームレス』問題は、それらの人々を包摂しながら宗教活動を営んでいる諸宗教の、包摂力・救済力低下の問題である」という見解は傾聴に値する（p. 209）。

このように、全体として II 部では、過疎やホームレスといった喫緊の社会問題に対して、宗教がもたらすソーシャル・キャピタルのもつ可能性が、大きな期待をもって語られている。

【III　生成する新しいつながり】

III 部では、これまでの宗教には見られなかったような新しいつながりの諸相が、具体例を用いながら論じられている。

7 章「ボランティアをする人たちの動機にみる宗教性」（板井正斉）は、宗教団体によるボランティアだけにとどまらず、ボランティア一般の行為における「後づけ的に生まれてくる宗教性」（p. 235）をめぐる諸論点を論じたものである。宗教性の議論に関しては、稲場圭信による先行研究である「無自覚の宗教性」論を継承したものとなっている。

8 章「集合墓を核とした結縁 :『桜葬』の試み」（井上治代）は、井上自身が理事長をつとめる NPO 法人エンディングセンターによる、集合墓や、会員同士の支え合いの取り組みについて論じたものである。グローバル化する時代の中で地域社会や家族が衰退してきているが、エンディングセンターの会員たちのつながりは、「これまでの地縁・血縁・社縁を代替するネットワーク」（p. 258）になりうる可能性があるだろう。

9 章「宗教のインターネット活用が築くソーシャル・キャピタル」（黒崎浩行）では、２つの寺社における、インターネットを通じた寺社と信徒との情報交換のあり方などを論じている。黒崎によれば、インターネットは、むしろ既存の宗教的ネットワークを補完する役割を果たすことも多いとい

う。

コラム・現場からの声③「ともに寄り添い、ともに学ぶ」（吉永岳彦・山下千朝）は、ホームレスにおにぎりを配る活動をしている仏教系団体「ひとさじの会」によるものである。その活動は、むしろ援助者側にとって自助グループのような様相を呈することもあるといった記述が興味深かった。

3. 評価

本書を一読した印象は、3.11 以降の問題関心に裏打ちされた、宗教の社会貢献についてのタイムリーな一冊、というものである。「絆」「つながり」が注目されやすい時代背景とも共鳴していると言えそうだ。従来より特にキリスト教系団体はホームレスへの支援などをおこなってきているが、格差社会化、無縁社会化が進む世の中では、他の宗教にも弱者救済への期待がかけられているのだろう。この書が、人権や貧困問題に関する書籍を多く手がけている明石書店から出版されていることも決して偶然ではないだろう。

また、コラムだけでなく、各章を執筆している研究者自身が、その章のフィールドである NPO の代表であったりすることも、今の時代の反映であると言えよう。「宗教研究の主体と客体の区分の越境」（p. 169）自体を、本書が既に体現していると思われる。

書籍の制作面について言えば、本書における全３部・９章構成もほぼ成功していると思われるし、各章の長さも長すぎず適切である。取り上げられている対象についても、複数のフィールドにおける研究が、豊かで多彩に結実していると言えよう。

以上が全体的な本書の印象であるが、以下では、若干の批判的コメントも加えてみたい。

まず、新刊書でこうしたテーマを扱う以上、先進的な一部の宗教者の取り組みにスポットライトがあてられるのは無理からぬことであろうが、こんにちに至るまで日本の共同体を支えてきた、伝統宗教の持つソーシャル・キャピタルももっと評価されて良いはずだ。この面では 1 章の藤本論文で神道の例だけは充分に取り上げられているが、伝統仏教一般や、日本のキリスト教についての事情も知りたいと思う読者も居るだろう。たとえ

ば「葬式仏教」と言うが、葬儀のような重要な人生儀礼を、ほぼ単独の宗教が担っているのは、むしろ伝統宗教の強みであるとも考えられる。

また「ソーシャル・キャピタル」研究のひとつであると銘打つのであれば、全体社会に対する目配せももう少し欲しいところである。たとえば、日本における「学校縁」、「会社縁」は本当に衰退しているのだろうか。衰退しているとすれば、宗教縁はどのような場面でもっとも再活性化しやすいのだろうか。さらに言えば、日本は諸外国と比べてソーシャル・キャピタルが希薄な社会なのか、それとも豊かな社会なのか。そういった視点があっても良かったはずだ。

同時に、日本の全国各地を等しく見てゆけば、「宗教によるソーシャル・キャピタル」については、決して楽観視できる状況ではないことも明らかだろう。この点が明示的であったのは過疎地を扱った 4 章の櫻井論文のみである（「信仰継承の断絶」p. 136、「ソーシャル・キャピタルの衰退」p. 146 など）。また、布教活動に対して強い忌避感がある 21 世紀の日本で、これから宗教が直接多くの人に手を差し伸べられるのだろうか？　そういった点の分析も不可欠だろう。

宗教研究においてこれほどまでにソーシャル・キャピタルが論じられているのはなぜなのだろうか。宗教研究における「ソーシャル・キャピタル」概念の隆盛は、偶然だが「スピリチュアリティ」概念の隆盛ときわめてよく似ている面がある。ソーシャル・キャピタルもスピリチュアリティもともに、最初期には日本人の多くにはなじみのない外来語であり、それでいて概念の範疇がとても広い。また、その概念から想起しうる日本における伝統的な動向　––スピリチュアリティならば日本の伝統宗教におけるスピリチュアリティ、ソーシャル・キャピタルならば外国人がうらやむような日本人の相互信頼の強さなど––　が必ずしも研究者には認知されていないという点まで共通している。宗教研究におけるソーシャル・キャピタル概念の台頭の理由は、それが「無縁社会」以降の問題関心と結びつきやすいということだけでなく、宗教と社会をめぐるほとんどの問題系に活用可能な広い概念だということもあるだろう。

アメリカの宗教社会学者、ロバート・ベラーらは、『心の習慣』（1985）の中で、現代社会における道徳の源泉として、宗教などの伝統に基づく「伝統主義」、自己の利益を最大化しようとする「功利主義」、そして自己実現

や自己表現を目指す「表現主義」の３つを抽出した。本書で表されているような、ソーシャル・キャピタルをもたらそうとする現代日本の諸宗教やNPO の動きを、ベラーらの枠組みで再解釈すればどうなるだろうか。社会貢献する宗教者たちの多くは、功利主義的なグローバル社会の趨勢にはきわめて批判的であるが、そうした社会を少しでも良くするために宗教的な伝統を再活用しようとしている。そして本書を通じて意外にも見えてくるのは、NPO や先進的な寺社などの活動における、ある程度表現主義的、自己実現的な実践動機である。

宗教と社会貢献が新しい分野であるのと同様、日本における宗教とソーシャル・キャピタルの研究も、まだ萌芽状態にある。しかしだからこそ、そこには大きな可能性もある。本書に寄稿している多様な論者たちの多くは、21 世紀の宗教と社会をめぐる最前線で、社会貢献しながら研究をおこなっている。本書は、今後の研究のための良きスタートラインのような著作になったと思われる。

参考文献

Bellah, Robert N et al. 1985 *Habits of the Heart*, 島薗進・中村圭志訳 1991『心の習慣』みすず書房。